

## 玉本英子さん講演会

5月18日、ジャーナリストの玉本英子さん（アジアプレス）による講演会「写真と映像で伝えるイラクのヤズディ教徒 ISによる迫害と現状」が開催された。

クルド人の中で信仰されている少数宗教・ヤズディ教は、神のほかに「孔雀天使」と呼ばれる存在を崇拝するゆえに、中東における多数派の宗教であるイスラームからは、悪魔崇拝の宗教とみなされ、しばしば迫害を受けてきた。イラク国内では約60万人の信徒がいるとされるが、ヤズディ教徒内での通婚を原則として、コミュニティの伝統の維持に努めている。

2013年にイラク・シリア一帯で台頭した過激派組織「イスラーム国(IS)」は、ヤズディ教を攻撃対象のひとつとした。2014年夏には、イラク北西部・シンジャルのヤズディ教徒の村が攻撃され、一部はイラク北部の比較的安全なクルド人自治区に逃れることができたが、逃げ遅れた一部の村民は、ISによって殺害されるか、捕虜となるなどの被害を受けることとなった。講演では、生存者の証言を中心として、ISによる襲撃の実態や、ヤズディ教徒女性の性奴隷化の実態が紹介された。

また、講演では、ISによる迫害の様子だけでなく、ISの脅威が去った後のコミュニティの現状についても紹介された。ISによる攻撃を受けたヤズディ教徒の多くは、ムスリムが居住する村に囲まれた元の村に戻ることができず、イラク北部のクルド人自治区の難民キャンプに暮らすか、ヨーロッパで難民として暮らすことを余儀なくされている。また、ISのもとで捕虜とされ、洗脳教育を受けた子どもたちのヤズディ教コミュニティへの復帰が困難をきわめていること、IS戦闘員とヤズディ教徒の女性の間生まれた子どもの地位が宙に浮いていることなどが紹介された。

ISの襲撃以降、多くのヤズディ教徒が殺害・虐待されたことで、コミュニティは大きな傷を負うこととなった。ISが去った後も、生活基盤や人間関係が根本的に変容してしまった状況で、ヤズディ教徒は今後の生活を築く上での多くの困難を抱えている。ISによる迫害の実態とその被害の大きさを知るとともに、「IS以降」の生活の再構築の困難さについて、講演中に紹介されたヤズディ教徒一人ひとりの証言から痛感する講演であった。会場からは、イスラーム国元戦闘員の裁判をめぐる状況、ジャーナリストとして危険地に赴く心情などについて質問が寄せられた。

(文責：黒田彩加)